「観光会議」を引き受ける

「交野市星のまち観光会議」（協会の前身）は二〇〇四年一一月に設立されました。

それを遡る二年まえあたり、松下電器の同期入社で、同じ妙見坂の友人の藤井さんから「交野で観光事業をするとしたら、こんな考えはどうか」と何度か、話をもちかけられました。彼は、「交野市観光振興ビジョン」づくり委員の募集を、市の広報で見、ただひとりの市民として参加しているのでした。

京都生まれ京都育ちの私は、終戦の傷もまだ癒えない昭和二五年ごろ、いちはやく京都が「国際文化観光都市」というコンセプトをかかげ、その線にそって整備発展していく姿をみてきましたので、その話題には少なからず興味がありました。

とくに、観光開発やハコもの建設はしない。交野の豊かな自然と文化を大切にし、まず住民が住んでよかったと思えるまちをつくる。そこへ観光客をよび、訪れてとよかったと感動してもらう。そんな「住んでよし。訪れてよし」の観光はどうか、と彼がいうのを、私は、両手をあげて大賛成と答えていました。

京都では、哲学の道でも嵯峨野でも、ゴミのないきれいな町、見た目に美しい町並み保存など、町あげて観光の取り組みが行われるのを知っていますので、藤井さんに、「住んでよし。訪れてよし」のまちづくりは、「市民の自発的な思い、住民自らの手によって」行われねば本物でないと、よく話しました。

それからしばらくすると、藤井さんは、「交野の観光ビジョンづくりは終わった。いま、交野市の要請を受けて観光協会づくりの骨子をまとめている。協会ができたら、佐藤さんが引き受けてくださいよ。あなたには松愛会という組織があるから、お願いしますよ」と、何度か話をもちかけられました。

私は、深い考えもなく「ああ、いいですよ」と答えていました。

観光ビジョンづくりのとき、藤井さんに自分の意見を何度か話していますので、何の違和感もなく、その続きとして、彼がつぎに観光協会づくりに取り組んでいるのなら、協力するのもやむをえないかなと、感じていたのでした。

ちょうど支部長を引き受けて二年目のころで、竹炭ボランティアも軌道に乗っており、彼のそんな要請も、心の負担にはなりませんでした。それに、松愛会の支部長は、あと二年一期で渡邉省三さんに譲ると決まっているので、自分のつぎのテーマとして交野の観光の仕事を引き受けるのは一つの選択かなとも考えていました。

交野の歴史は勉強していませんが、もともと、歴史とか古い寺社、芸術・文化といった領域はきらいではありませんので、漠然とですが観光の仕事には関心があったのでした。

天の川と七夕・星伝説のまち交野（一）

竹炭ボランティアのところで、断片的に交野の歴史にふれていますが、ここで少し詳しく述べておきたいと思います。

交野市は、大阪府の北東に位置して京都と奈良に近接し、面積約二五平方キロメートル、人口約七万七千人、面積の半分が生駒山系と呼ぶ山地や田畑となっています。東京品川区の面積が約二三平方キロメートルですから、ほぼこれに匹敵し、人口は大阪府に四三市町村あるなかで、後ろから一三番目にあたります。

交野には、物部氏の始祖とされるニギハヤヒが、天の磐船に乗って天から降り立ったとされる哮が峯があり、天の川を挟んだ対岸に、そのときの天の磐船と伝えられる船形の巨石をまつる磐船神社があります。

いま、古代史では、奈良県三輪山麓の纒向遺跡が話題となり、神武天皇の大和朝廷建国より前、ここに王朝があったという説が唱えられています。古代の歴史書「先代旧事本紀」の語るところでは、ニギハヤヒは、哮が峯に降り立ったあと、峠を越えて奈良の鳥見の白庭山にはいり、王朝を築いたとありますが、その王朝の跡が、三輪山麓の纒向遺跡ではないかというのです。

桓武天皇は、七八四年、都を奈良から長岡京に移します。そのとき、唐のやり方を見ならって長岡京の真南の交野が原で、新都の災厄を祓う天壇の祭りを行い、その後何度も、ここへ桜がりや鷹狩りに訪れます。以来、鎌倉時代あたりまで、交野が原は平安貴族のリゾート地としてすっかり有名になります。

なかでも交野の中央を流れる天野川（愛称：天の川）は、中国から伝わった七夕伝説の銀河になぞらえられ、好んで和歌が詠まれます。代表的なのに、平安初期の『伊勢物語』の八十二段、在原業平が、惟喬親王とともに天の川を訪れて詠んだ和歌があります。

狩り暮らし棚機つめに宿からむ　天の川原にわれは来にけり

江戸時代、この地を訪れた貝原益軒は、「こんなに白砂の延々とつづく美しい川は見たことがない。星をちりばめた銀河そっくりで、まさに天の川という名がぴったりだ」と書き残しています。天女が空から舞い降りて水浴びする「羽衣伝説」も、天の川には残されています。羽衣伝説は、三保の松原、余呉湖など風光明媚な土地に多いのですが、この川も、そうした条件を備えていたに違いありません。

天の川　遠き渡りになりにけり　交野の御野の五月雨の頃　　藤原為家

七夕は　思い知らなん天の川　急ぐ渡しに船を貸しつる　　津守国助

ともに鎌倉時代の作ですが、増水した天の川や長閑な渡し舟の様子を伝えています。

天の川と七夕・星伝説のまち交野（二）

またや見ん　交野のみ野の桜がり　花の雪散る春のあけぼの　　藤原定家

やかたをの　鷹手にすえて朝立てば　交野の原にきぎす鳴くなり　藤原基俊

ともに平安後期の和歌ですが、近くに庵でも結んだのでしょうか、早朝、曙のころに落花をめでたり、朝露を踏んで鷹狩りに出かけたりする大宮人の風流がよくわかります。当時、交野が原への一般人は立入禁止で、いまも『禁野』という地名が残っています。

交野の東に生駒山系に属する標高三四四メートルの交野山があります。頂上には観音岩と呼ぶ巨岩があり、かつては信仰の対象でした。上に立つと大阪湾が望めます。この一帯には巨岩が多く巨岩信仰が盛んで、修験道の霊地となっていました。

九月中旬ころ、交野山上空を、サシバ（鷹の一種）の渡りが通過していきます。夏鳥として日本に飛来し、雛を育てて南へ渡るのですが、頂上の観音岩は、人間の信仰の対象であるばかりでなく、彼らの帰路のしるべでもあるようです。

交野山の遠く南方山中に、獅子窟寺とよぶ真言宗高野山派の古刹があり、寺伝では飛鳥時代、役小角が開祖と伝え、国宝薬師如来坐像（平安時代）が祀られています。

平安時代、弘法大師が、ここの寺号の由来である獅子の岩屋で祈祷を行うと、北斗星が流れ星となって近くの星田村三ヵ所に降ったという「星降り伝説」が伝えられ、いまも、星田妙見宮、光林寺、星の森では、そのときの石が大切に祀られています。

「交野市星のまち観光協会」という呼び方は、この伝説に由来します。

交野山のすぐ下に機物神社があります。もともと、交野山頂の観音岩を拝む聖地でしたが、五、六世紀ころ機織技術をもった渡来人が移り住み、祖先の漢人庄員を祀って氏神としました。平安時代、貴族が訪れるようになったあと、氏神が、織姫にかわります。

江戸時代の記録には、毎年七月七日、身を清めた童男ひとりを立てて祭礼をおこなったとあります。それによると、祭神は織姫でも、当神社における七月七日の祭礼は禊だったと推察されますが、昭和五四年、神社境内いっぱいに笹飾りを立てて行う今日風の七夕祭が始めら、七月七日の夜、神事として天の川にかかる逢合橋から短冊を流します。短冊に願いを書く子供たちや笹飾りでにぎわう境内の様子がテレビなどでよく放映されます。

弘法大師が降らしたとされる巨石がご神体の星田妙見宮では、これを影向石、つまり神仏が姿を変えた石として祀り、別名「織女石」とも呼びます。江戸時代、貝原益軒が当地を訪れたことは先述しました。彼は、この神社を指し「この谷の奥に星の社がある。そこに祀られているのは、牽牛と織姫である」と残しています。この神社でも、近年、神楽を奉納し、最後に願いの短冊を焚きあげる七夕神事が行われるようになりました。

星のまち観光の基本を企画する（一）

「交野市星のまち観光会議」が発足しました。専属スタッフがあるわけではありません。役員は各界を代表する方が何人か名のみを連ねるばかり、市の職員は部長と課長と担当者の三人、これも皆、専属ではありません。

「星のまち観光会議」といっても、オフィスや専用の机・電話もなく、どこに勤務場所があるわけでもない天涯孤独の自分と肩書きのついた名刺が一枚あるだけです。

藤井さんたちの作った「交野市観光振興ビジョン」はあります。なかなかよくできています。それに、当初もらったのは、「ビジョン作成のための調査資料」ファイル一冊と数枚のメモ。ファイルは交野に関するいろいろなデータが詰まっていて、なかなか役立ちそうです。メモは、設立の経緯やとりあげるべき事業内容などです。でも、それらは、所詮、食材であり、おいしい料理として食べられるまでには、レシピや調理が必要です。

つまり、決まったものは何ひとつなく、すべてを築きあげねばならないのでした。

週に何度か役所と定例会議をもって課題をひとつずつ潰そうかと考え提案しましたが、なぜか、あまり気乗りしない様子でしたので、単独で取り組もうと決心しました。

資金については、二年間は市で面倒をみるが、三年目からは「交野市星のまち観光協会」として資金面でも独立してほしいといわれました。

会長の報酬ですが、すべてボランティアで一切何も出さないというのです。私は、当初からそのつもりだったのでかまわないが、相当な苦労を強いる仕事と思われるため、せめて謝礼年百万円ということは考えられないか、でないと後任は見つからないだろうと持ちかけましたが、うやむやのままでした。私欲と誤解されるのが嫌で、以降、口にするのはやめました。このあたり、藤井さんが、後々のためにもっとよくつめておいてくれたらと恨めしく思いました。

あとになってわかるのですが、二〇〇五年の初年度、市がつけてくれた予算は二〇〇万円でした。それで、謝礼の一件が暴論であったことが、ようやくわかりました。

交野市が観光事業にかける思いの象徴というのでしょうか、思いはあっても財政が許さないというのでしょうか、資金に余裕なし、スッタフなし、オフィスなしなど、まったくないないづくしの出発となりました。しかし、松愛会の支部長は、あと一年、二〇〇六年度から渡辺さんに譲るので、別に負担を感じるということはありませんでした。

さて、企画に必要な要素としてよく5W1Hといいますが、なかでも大切なのは、3W1Hで、Why（なぜ）、What（何を）、How（どんな方法で）、Who（誰が）だと思います。これに沿って企画の経緯を述べたいと思います。

星のまち観光の基本を企画する（二）

まずＷｈｙとＷｈａｔですが、交野は、先述のように、豊かな自然と古い歴史、七夕伝説がります。そこで観光事業の柱を、つぎのキャッチフレーズであらわしました。

「観光開発はしない。わがまちの宝を磨いて感動を売ろう星のまち観光！」

磨く「わがまちの宝」は五つにわけました。宝の第一は、まち並みと旧街道です。

もっとも古い歴史的建造物としては、日本一長いといわれる白壁の長屋門をもつ「北田家代官屋敷」、大きい萱葺き屋根の「山添家庄屋屋敷」（ともに江戸中期建造、重要文化財）があります。星田、私市、私部、倉治といった古い地域には、おそらく明治時代以降の建造と思われる美しい白壁や黒壁の長屋門の町並みが、そこかしこに残っており、ひなびた懐かしさがあります。岸本信夫さんという交野の画家が、こうした美しい町並みを風情のあるスケッチ風水彩画に描き、しばしば個展を開かれています。

古い町並みのそこかしこに七夕伝説ゆかりの機物神社や星田妙見宮など歴史の古い神社仏閣が点在しています。ほとんど整備保存されず荒廃が心配されるのですが、交野の周囲を旧東高野街道が走っています。大阪夏の陣のとき、徳川家康は、同じ三河出身で星田の庄屋だった平井家に宿営するのですが、このとき家康は二条城からこの道を通って星田に入ります。鳥羽伏見の戦で幕府軍は大阪城からこの街道を通って攻め、退散してきます。

こうした旧街道と町並み、神社仏閣などを結び、交野の「星のまちめぐりウォーク」として売り出したいというのが、第一の交野の宝です。

第二の宝は、天の川と七夕伝説です。このふたつは、古くから深くかかわっていたことは、すでに述べました。それを現代風にアレンジして七月七日に行うのが「天の川七夕まつり」ですが、これは後に詳しく述べます。

第三の宝は、山岳とその自然です。大阪府と奈良県の府県境を南北約三〇キロに走る生駒山系は、金剛生駒紀泉国定公園の北端にある山系です。さらにその最北端が交野の東を走っており、北から交野山（標高三四四メートル）、旗振山（同二四五メートル）、竜王山（同三一二メートル）と並び、巨岩が多く山道が四通八達し、山歩きの楽しみを倍加させます。山中には、大阪府府民の森「ほしだ園地」「くろんど園地」や、「星のブランコ」とよぶ日本最大級つり橋、「交野市立ふるさといきものふれあいセンター」などがあります。山麓には、神宮寺遺跡など弥生時代の遺跡、大畑古墳など古墳時代中・後期の遺跡が点在して田園風景が残り、自然が豊かです。交野は、以前から「きさいちハイキングコース」として知られていますが、ハイキングにあわせ、自然や歴史も楽しめる「自然・歴史探訪ハイキングコース」といったものに再編する必要があると思われます。

星のまち観光の基本を企画する（三）

十二月七日

第四の宝は、特産品とお店です。目下、交野しかないといった特産品は比較的乏しく、漬物、塩昆布、和菓子、ハチミツ、清酒、ワインなどがあります。また、農作物としては、神宮寺のブドウ、みかん、私市のいちご狩り、いも堀りがありますが、特に、いちご狩り、いも堀りをする農家は、近年、ほとんどなくなりました。

当初引き継いだ「観光会議の推進事業（案）」には、「交野百選」の公募とか、「交野ブランドの創設」などの項目があります。第四の宝は、これから、かなりのテコ入れをして売り出す必要がありそうです。

第五の宝は、自然体験やイベントなどです。たとえば、天の川にはカワセミが生息し、交野山山中の白旗池には、冬季、オシドリが渡ってきます。秋、交野山を中心にサシバの渡りも見られます。くろんど園地では、初夏、平家ホタルがたくさん飛びます。

交野山中には、「交野市立ふるさといきものふれあいセンター」や「交野市野外活動センター（夏季）」、また、天の川上流域には、竹炭ボランティアの窯のある「星の里いわふね」や「大阪市立大学付属植物園」などもあります。

こうした自然条件と施設を総合的に活用して自然豊かな交野ならではのユニークなイベントなどが企画できると思うのです。

つぎに、では、それらをＷｈｏ（誰が）、Ｈｏｗ（どんな方法で）やるかが大切です。そこで、観光事業の第二、第三の柱を次のキャッチフレーズであらわすことにしました。

「理解と納得。市民の知恵と手で育てよう星のまち観光！」

「まず何をやるかを決め、それに最適の組織、人を決める。組織は小さく人は適材少数」

一言でいえば、交野市観光事業のスタートといっても、会長以下、全員が無償のボランティアです。どうしてそのボランティアを集め、協力をえるのかが最も大切となります。そこで、第二の柱のもとに、第一の柱同様、５本の柱を立てることにしました。

先ず第一は、Ｗｈｏ（誰が）ですが、「自発的協力」をモットーに、市民・地域・各種団体・ボランティアに呼びかけを行い、協力を得るようにします。その際、理解と納得を得るためには、「事前説明と対話」が不可欠ですから、これが第二のモットーです。単に市民や地域ばかりでなく、企業や観光協会に加入の組織、直接協力を仰ぐ団体の上部機関にも配慮が必要ですから、これらを「協力支援団体等の確立」とあらわし第三のモットーとします。第四は、観光資源をもつ人への「提案型活動」です。最後は、協会の資金確保についてですが、実績を積み、「長い目の活動」によって収入を得るようにします。こうしたことすべては、少数による適所適材でやることとします。